

光と影の画家レンブラント—技法と生涯

宮内良広

(防衛大学校)

レンブラント・ファン・レーンという17世紀の画家をご存知でしょうか。彼は、革新的な版画・絵画技術を考案し、人の網膜に映る明暗、色彩の制御について生涯にわたって研究し続けました。人の感性に訴えるために磨かれ続けたその技法は、今日のシリコンフォトニクス製作あるいは3Dプリンティングにも通じるものがあります。本稿では、光と影の画家といわれるレンブラントの技法と生涯にハイライトを当ててみました。

1. 版画家レンブラントと和紙

より自由に光と影を制御したい、そのような思案の中で、レンブラントは修行時代からエッチングという独自の手法を編み出し、銅版画制作の模索の中で発展させました。今日の半導体エッチング工程と同様に、金属版の表面に(レジストとして)溶かした蜜蝋、樹脂を薄く均一に塗り、その上を針でひっかきながら絵を描き、酸性溶液に浸してひっかいた部分を腐食させ、その後蜜蝋などを流して版画版を作る、という手法です¹⁾。この腐食した部分にインクを流し込み、紙をプレスすると、柔らかく動きのあるタッチで版画を描くことができます¹⁾。

1640年代には、当時日蘭貿易によって流通し始めた和紙を使っています。和紙を利用した理由は、保存性・インク吸収のよさ・丈夫さに加え、色調が黄色味を帯びており、温かく神秘的な照明の描写に適していたためです¹⁾。ただし、晩年は版画制作に限界を感じ、絵画制作にのみ注力したといわれています¹⁾。

2. レンブラントの明暗の技法1—グラッシ

レンブラントは、構図を明部と暗部に分割する技法“キアロスクーロ”を早くから取り入れ、生涯にわたって最も表現力豊かな描写法として活用しました。意外なことに、この技法を支えた原色はたった10色程度でした^{2,3)}。描き始める前に、これらの顔料を粉碎し、調合しなければなりません。また、描くときには一層ずつ塗り重ねるほかに、乾くまでの間じっと待たなければならないことが



図1 「夜警」の中央部。

しばしばあったそうです²⁾。それゆえ、レンブラントの絵画の明暗と色彩は、顔料の積層構造によって構成されています。

レンブラントの絵画の特徴として、暗部の黒の多様性、黒の分解能の高さを挙げる人は少なくありません。暗部はグラッシとよばれる手法で描かれました。グラッシは、不透明な絵の具の上に薄い透明の絵の具を塗ることにより、深みと艶のある色を作り出す技法です。例えば、黄色層の上に透明な青を塗ると、透明層での光の反射により、深みと艶のある緑を描くことができます。グラッシはレンブラントが多用した革命的な手法であり、現在でも難易度が高いとされています²⁾。レンブラントの代表作「夜警」(図1)では、幾人かの兵士の顔、旗手の飾り帯、少女の縁などに適用されています。暗部、ときには最暗部さえ、透明色のダークブラウンなどのグラッシで仕上げました²⁾。暗部をグラッシで仕上げることにより、暗色の濃さと深みが増し、多様でうねるような闇を作り出しました。

3. レンブラントの明暗の技法2—インパスト

レンブラントの絵画制作の工程は、やや暗い褐色の地塗りから始め、次第に明るいトーンでおもなフォルムを構成していき、最後はハイライトで仕上げる、というものです²⁾。それゆえ、レンブラントの絵画の薄い箇所は暗部



図2 晩年の自画像。

に、厚い箇所はハイライトにみられます。

ハイライトは、インパストという手法で作成されました。インパストとは、絵の具を厚塗りし、盛り上げたところに絵筆の柄やパレットナイフで刻みを入れて、凹凸構造を作成する手法です²⁾。この明部のインパストに用いた原色は不透明な鉛白です³⁾。レンブラントはこの白をいくつかの色と混ぜ、乾いた質感とともに力強い筆跡を残しています。晩年の自画像(図2)では、顔の描写において絵の具が厚く塗り重なり、絵の具が生々しく混ざり合っています²⁾。その画筆での剛毛の跡が細かな溝を残し、下層の絵の具の色を見せ、その色を対比させることにより、血の通った肌の色合いを醸し出しています。また、その厚塗りによって0.1 mmスケールの凹凸がある激しいテクスチャーを作り、光を反射させることによって三次元的なフォルムの印象を与えています^{2,3)}。夜警(図1)においては、ライトアップされた中央右側の白い服を着た副官の帯や、少女の肩布の鮮やかな刺繍の描写に使われています²⁾。

このように、レンブラントは凹凸のある層構造によって高い分解能の明暗と色彩を描き出したといえます。その描き方は、インクジェットプリンターのように数種類のインクを混ぜて同時に塗るのではなく、3Dプリンターのように色の層を積み上げたところに切削加工を施して仕上げる、というものでした。

4. レンブラントの生涯—光と影

光と影の画家レンブラントは、栄光と悲愴の生涯を送りました。その意味でも光と影の画家とよべます。1606年、繁栄期を迎えるオランダにレンブラントは生まれました。

14歳のときライデン大学に進学しますが、わずか数日で大学を離れ、その後幾人かの画家のアトリエで過ごすようになりました。1631年にアムステルダムに移住し、「トゥルプ博士の解剖講義」で卓越した肖像画家としての名声を確立し、以後肖像画の注文は1640年まで途絶えることはなく、栄光の時代を過ごしたそうです。1634年にサスキアという女性と結婚し、その後絵画や版画、骨董品を収集するようになります。この時期の画風は当時の流行に即し、優美なリアリズムをみせています²⁾。

1640年以降、このような誇張は次第に姿を消し、抑制のきいたトーンへと変わっていきました²⁾。この作風の変化は私生活の出来事に起因するといわれています。サスキアの生んだ最初の3人の子は乳児のうち亡くなり、4番目の子ティトゥスだけが成人したものの、早世しています。1642年にはサスキアも亡くなります。しかしその筆は衰えず、同年、群像の最高傑作とよばれる「夜警」を製作しました。

晩年は当世風の優雅な肖像画を拒否し、独自の技法を模索するようになりました。時勢に背き独創性を深めた絵画への注文は激減しました²⁾。生来の収集癖と浪費癖も災いし、1656年に自己破産して全財産を手放すことになりました。1663年には内縁の妻ヘンドリックを失い、5年後ティトゥスも亡くなります。翌年、レンブラントは人知れず孤独の中で死去しました。このような人生最後の時期において、レンブラントの芸術はもはや同時代の美術の約束事、様式上の規範を完全に超え、独自の技法を発展させていきました²⁾。1663年に作成された自画像(図2)は傑作のひとつとうたわれています。レンブラントの苦難がうかがえると同時に、その表情には落ち着きや自信さえも感じられます^{2,4)}。

レンブラントはキャンバス上に巧みな色の積層構造を組み立て、時には切削加工を施すことにより、網膜で識別できる限界に近い、高い分解能の明暗、色彩を表現しました。本稿が、リソグラフィーや3Dプリンティングなどによる光の制御法あるいは色彩表現手法の開拓のための刺激となれば、筆者の望外の喜びです。

文 献

- 1) 貴田 庄：レンブラントと和紙(八坂書房, 2005)。
- 2) A. モラル：巨匠の絵画技法—レンブラント(北村光一訳, エルテ出版, 1990)。
- 3) D. Bomford, J. Kirby, A. Ruger and R. White: *Rembrandt Art in the Making* (Yale University Press, London, 2006)。
- 4) A. G. ディクソン：世界の美術(樺山紘一訳, 川出書房新社, 2009)。